

悩みながら二人三脚

東京電力福島第一原発事故に伴い、福島県いわき市から群馬県前橋市に避難した丹治杉江さん(61)は避難して7年近くになります。それでも目が覚めた時、「あれ、どうしてここにいるのだろう」と思うことがあります。

「群馬で福島を支援し続け、原発ゼロを求める仲間と出会えた。夫に仕事があり経済的にも何とかなっ



育ちも福島県の幹夫さん(64)は「俺はカネ稼いで、母ちゃん応援と笑います。自宅兼仕事場のワープロの修理専門店「福島デオ」。全国から寄せられたワープロが所狭しと並んでいます。

いわき市から「自主避難」

丹治杉江さん(61)、幹夫さん(64)



丹治杉江さん(61)と幹夫さん(64)の住居で

原発ゼロ 次世代につなぐ

自主避難とは

政府による原発事故の避難指示区域(強制避難)以外の地域からの避難の通称。国は自主避難者数について掌握していません。自己責任による避難として扱われ、東京電力の賠償もほとんどとれていないのが実態です。

母子避難、二重生活が多々、2015年にNHKと早稲田大学が行った調査で「ローン、借金がある」と答えた人は自主避難者で40.7%となるなど、多くが経済的困難を抱えています。

「7年たつと福島も原発事故も思い出さなくなり、恐怖がフラッシュバックしなくなり。ふるさとって山河もあるけど、やっぱり人の関係なんだと思う。もちろんいいことばかりじゃないけど、そういうものが全部ぶつんと切られてしまった」と幹夫さんはいいます。

福島伝え続ける

丹治夫妻のいわき市の自宅は福島第一原発から直線で約35キロの地域。政府の避難指示区域外に位置するため、一般的に自主避難と呼ばれています。

原発事故直後、いわき市のモニタリングポストは一時、毎時24放射線を超す放射線量を記録。福島県喜多方市に避難した丹治夫妻は、水道が開通した約1カ月後にいわき市に戻り、自宅のリフォームをし、生活を再

気持ちに整理がつきました。「私は前橋市いわき町の住民になる。福島のこと、原発事故のことを生涯かけて伝え続ける」

人権尊重社会へ

原発集団訴訟の最初の判決となった17年3月17日、前橋地裁。判決は津波の予見性を認めて東電だけでなく、国にも責任があるとの判断を示し、自主避難についても「一般市民の感覚からいって当然認められる」と指摘しました。自主避難者へ東電の賠償はほとんどありませんが、少額ですが、従来の枠を超えた賠償も認めました。

原告としてフラッシュを浴びた杉江さんは「心からうれしい。夢中で6年間、生きて、たたかってきたことは良かった、と胸を張れます」と述べました。

杉江さんは8日から始まる東京高裁での控訴審でのたたかい、原発ゼロの運動だけでなく、憲法改悪阻止を求める運動にも取り組んでいます。

杉江さんはいいます。「私は原発廃止までは見届けられないでしょう。原発ゼロは世代をこえたたたかい。人権が尊重される社会づくりと結びついたらたかいです。運動の中では意見の違いもあります。でもそこは認め合い、悩みながらこれからもたたかい続けます」

(柴田善木)